金剛寶戒寺便

令和七年五月一日発行　第一三四号
https://www.houkaiji.jp

檀信徒の皆さま、こんにちは。朝晩はまだ肌寒く、冬のお布団を片づけるタイミングを逃している今日この頃です。今年のゴールデンウイークは清々しい陽気に恵まれそうです。

さて、四月の法話会では「死について考える」というテーマでお話をいたしました。少し重たい題のようにも思えますが、「死」とは誰にとっても身近で避けられないものであり、だからこそ、時には立ち止まって考える機会が大切だと思っています。

私自身が、はじめて「死」と向き合ったのは、母方の祖父が亡くなった時でした。まだ幼かった私は、その現実を受け止めることができず、押し入れの中でひとり泣いていた記憶が、今でも心に残っています。

その次に、死について深く考えさせられたのは、アニメ『銀河鉄道 999』でした。機械の体を手に入れて、永遠の命を得た人々が、かえって生きる意味を見失い、自ら命を絶っていく。そんな姿が描かれていたのです。「永遠に生きられることが、必ずしも幸せとは限らないのかもしれない」。子ども心に、そう感じたのを今でも覚えています。

同じような話は、ギリシャ神話にも登場します。暁の女神エオスは、愛する青年ティートーノスの命が永遠であるよう、神ゼウスに願い出ます。しかし彼女は、うっかり「永遠の若さ」を願い忘れてしまいました。

時が経ち、ティートーノスは老いて動けなくなり、女神はその姿を見て戸の中に閉じ込めてしまったといいます。この神話も、「永遠の命は本当に幸福なのか？」という、人間の根源的な問いを投げかけているように思えます。

仏教では、死を「終わり」とはとらえません。むしろ、「気づき」や「目覚め」のきっかけとして捉えます。

有名な「四頭の馬の譬え」では、人それぞれ気づくタイミングは違っても、「気づいて仏道に向かうこと」自体が大切だと説かれています。つまり、早く気づくかどうかではなく、気づいたこと自体が尊いのです。

以前の法話会でもご紹介した『樹木たちの知られざる生活』（ペーター・ヴォールレーベン著）という本があります。その中では、大きな木が倒れ、そこに光が差し込むことで、これまで日陰だった場所に新たな命が育つ――という、森の中の循環が語られています。

私たち人間もまた、死によって誰かを支える存在になれる。死を通じて、次の命が育つ「きっかけ」となる。それが自然の摂理なのだと私は思っています。今は「人生百年」の時代と言われています。けれども、私たちの体力や気力が百年に伸びたわけではありません。

だからこそ、これからは「どう生きるか」、そして「どのように次の世代へ継承するか」が、より大切になってくるのではないでしょうか。

ある方が、ふとした時に「長生きしても仕方がない」「いつ死んでもいい」とつぶやかれました。その言葉の奥には「今が楽しくない」「生きていても意味がない」という、見えない心の声が隠れていたように思えました。

たとえば、自分の子どもが「生きる意味がない」と言ったとしたら、私たちはどれほど胸を痛めることでしょうか。

これから年齢を重ねていく私たちは、まず「今この瞬間を楽しむ姿」を見せること。それが次の世代にとっての、生きる希望となるように思います。「生死一如（しょうじいちにょ）」という仏教の言葉があります。生きることと、死ぬことは別々のものではなく、つながっているという意味です。だからこそ、「今を大切に生きること」が、死と向き合う準備でもあるのだと思います。

法話の会
日　時　六月八日（日）十四時より
演　題　「感謝ノートのススメ」
　写経の会
日　時　六月二十四日（火）十四時より
会　費　千円
会　場　金剛宝戒寺　檀信徒会館